

## 学術大会の将来展望

東北文化学園大学医療福祉学部 星 文彦  
名古屋大学医学部 鈴木 重行

日本理学療法学会は、日本理学療法士協会が設立された1966(昭和41)年に第1回学会が開催されて以来、毎年1回、各都道府県士会の担当で開催されてきました。

当初は日本理学療法士学会の名称で行われてきましたが、理学療法学の構築には理学療法士のみならず多くの研究・教育者等を含めた議論が必要であり、学問として開かれた大会であることを意識し、第36回の広島大会から日本理学療法学会と名称を変更して今日にいたっています。

さらに、協会理事会で今後の学術大会のあり方が検討され、第34回日本理学療法士協会総会において、第41回群馬大会から以下の基本事項に沿って学術大会を開催する運びとなりました。

1. 学術大会長の権能および担当士会の独自性を尊重しつつ、協会が主催する学術大会としての継続性を重視し、大会準備委員会の実務的な負担の軽減をはかる。
2. 各専門領域研究会が実施している分科会を独立した学会として発展させ、学術大会としての役割分担と整合性に配慮しながら両者の発展をはかる。

上記を受けて、群馬大会では幾つかの試みが実施されています。その主な内容は、①応募された一般演題の査読は、協会学術大会部が担当することです。これ

までは、大会準備委員会が独自に査読者を依頼し査読結果を集計した後に、学会評議員会(当時)または学術局関係理事・部長等で組織された演題審査会の議を経て演題採択が決定されていました。本大会では、各専門領域研究会から推薦された査読者による審査結果を協会学術大会部が集計し、関係者の意見を聞きながら学術大会長が最終決定する手順となりました。これにより、大会側の実務負担は軽減し、かつ、査読者および査読方法の継続性は保たれるシステムが構築されました。また、②一般演題のうち優れたものを専門領域研究会ごとに口述発表することで、独立した学会への一段階とすることが実現しました。

本シンポジウムでは、第37回静岡大会の準備委員長を務められた内田成男氏、第38回長野大会の準備委員長であった大槻利夫氏とともに、第42回新潟大会、第43回福岡大会の学術大会長(予定者)にご登壇いただき、学術大会の過去、現在、将来について率直な意見交換をしていただきます。司会は、協会学術大会部長であるとともに第39回宮城大会の準備委員長であった星文彦と、学術局学術大会部を担当している鈴木重行理事があたります。

早期に各専門領域研究会が独立した学会を開催できるように支援し、日本理学療法学会の目的と実施形態について明確な方向性を打ち出すことは、理学療法の可能性を具体化する重要な一要素です。